

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（看護学）	氏名	八尋 陽子
学位授与の条件	学位規則第4条第①、2項該当		
論文題目 Effects of an Advance Care Planning Training Program for Certified Palliative Care Nurses in Japan （日本におけるがん患者のアドバンス・ケア・プランニングを实践する緩和ケア認定看護師への教育プログラムの効果）			
論文審査担当者			
主査	教授 田邊 和照	印	
審査委員	教授 折山 早苗		
審査委員	講師 寺本 千恵		
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>アドバンス・ケア・プランニング（Advance care planning:ACP）は，将来の意思決定能力の低下に備えるため，患者・家族などの対象者と医療者が今後の治療・療養への気がかかりや価値観を共有し，ケアを計画する包括的なプロセスである。日本のがん医療において，ACPの重要性への認識が高まっているが，ACPを実践していると認識している医師と看護師の割合は約20%～30%であると報告されている。認定看護師は熟練した看護技術と知識を用い水準の高い看護を实践する役割を担っていることから，ACPに関連のある緩和ケア認定看護師はACP推進への貢献が期待される。ACP実践の障壁として医療者の知識・技術の不足が挙げられるが，日本において緩和ケア認定看護師がACPに関連する知識・技術を体系的に学ぶことができる研修プログラムは報告されていない。本研究の目的は，ACPを体系的かつ実践的に学習できる緩和ケア認定看護師のための研修プログラムを開発し，その有効性を明らかにすることである。</p> <p>研修プログラムの開発に際し国外のACPのガイドラインや研修プログラムより12のトピックスを抽出し，類似性に基づき4つのモジュール「ACPの概要と看護者の役割」「ACPの法的根拠と倫理的背景」「ACPの話し合いを始めるコミュニケーション」「ACPの実践例と今後の課題」から構成される研修プログラムを開発した。研修方法は，講義やグループワークを導入し，参加者がACPに関する課題を共有し，解決策等を話し合えるように設計した。すべての研修は研究者が実施し，対面で行われた。</p> <p>九州・中国・四国地方の施設に所属する緩和ケア認定看護師を対象とし，研究目的，内容，研究参加の任意性など倫理的配慮を記載した文書を郵送し，Web上で参加申込を得た。データ収集は，研修前（ベースライン），研修直後，研修後3か月の3時点で実施した。主要評価項目をACPの実践（37項目5段階評価），副次的評価項目を看護師のがん看護に関する困難感（20項目，6段階評価），変化のステージモデルとし，研修プログラムに</p>			

対する評価も調査した。分析では、記述統計量を算出し、「ACP の実践」の尺度構成を行った後、主要評価項目、副次的評価項目に対し Wilcoxon 符号付順位和検定を実施した。変化のステージモデルについては変化を記述し、プログラムに対する評価はモジュールごとに分布を記述した。

本研究は 1 群の事前事後デザインとして実施した。認定緩和ケア看護師 60 人に研修プログラムを実施し、研修 3 か月後の調査に回答した 44 人のうち欠損値のある 5 人を除外し、39 人を分析対象とした。平均年齢は  $43.21 \pm 6.45$  歳、緩和ケア認定看護師の平均経験年数は  $5.05 \pm 3.15$  年であった。分析の結果、ACP の実践においては、患者/家族と医療者との間で ACP に関する対話が有意に増加した（介入前平均 = 24.49, 介入後平均 = 27.59,  $p = 0.045$ ）。がん看護の困難感については、ACP の知識・技術の不足に関する困難感が有意に低下した（介入前平均 = 4.85, 介入後平均 = 4.30,  $p = 0.001$ ）。変化のステージモデルでは、研修前から研修後 3 か月時点において、19 人（48.7%）がプラスのステージへ変化し、14 人（35.9%）が変化せず、6 人（15.4%）がマイナスに変化した。研修プログラムに対する満足度、理解度、内容の適切性、研修方法の適切性、目標の明確さの全項目において研究参加者の 90%以上が肯定的な評価を示した。

ACP に関する知識・技術を体系的に学習し、グループワークで ACP 実践の課題を共有することは、緩和ケア認定看護師の ACP 実践への動機付けになったと推察される。

以上の結果から、本論文は、緩和ケア認定看護師の ACP 実践を高める研修プログラムを開発し、効果が確認されたことから、我が国における ACP 実践の促進に貢献する研究として高く評価される。

よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。